最大の奇跡　　2026 年 5 月 24 日　聖霊降臨際・ペンテコステ礼拝

使徒言行録2章 1～13 節

本日は聖霊降臨祭・ペンテコステ礼拝をお捧げしています。この日は、イエス様が約束してくださっていた聖霊＝神の霊が降り、聖霊に満たされた弟子たちが、イエス様の復活の証し人として立てられ、福音を大胆に語り出し、そのことによって、キリスト教会が誕生した日でもあります。

毎年この日には、世界中の多くの教会で本日の箇所が読まれていると思います。それは教会がどのように誕生し、その宣教の歴史がどのようにスタートしたかを伝える聖書箇所だからです。ペンテコステの日、イエス様の弟子たちは約束された聖霊を待ち望んで、一か所に集まって祈っていたところに、激しく地面が揺れ動き、聖霊が弟子たちの上に降り、弟子たちは一変しました。イエス様を裏切ったペテロは大胆に福音を語り、ペテロの言葉を信じた三千人がその日洗礼を受けたと記されています（2 章 41 節）。それは、新しい時代の到来を告げる出来事でした。

「聖霊」、または、「御霊」という言葉は、旧約聖書の 100 倍位、新約聖書に出てくるといわれています。聖書では「霊」という原語は、「風・息吹」と同じ言葉で、この時に世界に吹き込んだ風は、今なお世界を吹き抜けて、世界の教会、日本の教会、そして私たちの教会にもたらせています。

聖霊の力

「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした」（2 章1～4節）

実に奇妙な描写です。毎年、毎年、何度も読んでいますが、実に奇妙です。しかし、弟子達はイエス様が語られたこの約束の聖霊を実際に見て、その音を聞く事ができました。この現象は、この時、一回限りの最大の奇跡といえる出来事です。現代に生きる私達は弟子達のように、実際に聖霊を見たり、音を聞いたりすることはできません。大切なことはそのような象徴的な出来事に注目するのではなく、彼らが聖霊を受けて、その御力に満たされたという事、そして彼らはどうなったかという事に目を向けていくことです。

聖霊は彼らを一斉に立ち上がらせたのです。イエス様を失った彼らの周囲には、身動きもできないような重苦しいものを感じていたと思います。しかし、聖霊の風が吹き込み、聖霊が満ち溢れ、復活の主イエスの証人として、炎のように熱き言葉が一人一人に与えられました。そして 2000 年以上経った今も、世界中に、そして今日の私たちの教会にも与えられているのです。

民族・国を越えた神の祝福

4 節では、聖霊に満たされた弟子たちが霊が語らせるままに、他の国々の言葉で話し出した、と記されています。それは、知らない外国語を自由に操る事ということではありません。言葉の壁や習慣の違いを越え、人の心の奥底に直接響く染みわたる言葉で、イエス様のことを伝えようとする熱心な心のことを現わしているのです。そして彼らの言葉を聞き、その出来事を神の偉大な業を見たと証言しています。神の霊が働いている時、私達人間の理解を越えて人に伝わってゆくものです。

ドイツ在住の際、各国から派遣されてケルンで伝道している教会の合同礼拝が定期的にありました。共に聖書から御言葉をお聴きして礼拝をお捧げして、輪になって手を繋いで祈りを捧げました。勿論、夫々の母国語が違います。しかし、そこに聖霊が働き言葉が違っても心が通じるのです。共にいてくださる聖霊が、心を併せたいと願う者の上に働いてくださるのです。外国の地で言葉の壁で不安になっていた私はどれほど聖霊の力によって助けられたことでしょうか。そして、不安よりも

心が通じ合う、分かり合うという喜びと力に満たされて 9 年間過ごしたようなものです。この聖霊の働きがなかったら9年間も異国の地で過ごすことはできなかったと思います。

話は変わって明治 30 年代の頃の一人の宣教師のことをご紹介したいと思います。日本は、外国から危険をも厭わず、多くの宣教師によってキリスト教が伝えられたことは皆様もご存知であると思います。伊豆大島にやってきたアウグス・マッソンという宣教師の説教はとても聞けるようなものではなかったといいます。日本語を上手く話すことができず、大きな奇声を張り上げているようなものであったそうです。しかし、彼の福音を伝えたいという情熱と信仰により、聖霊が島の人々に語りかけ、心が打たれ、多くの島民は信仰の道に入り、大島全体に福音が伝えられたといわれています。

さて、9 節以下には、様々な民族や地域の名が並べられていて、現在のイラク、イラン、アフガニスタン、トルコ、南はエジプト、リビアなどが含まれる地域で、複雑に民族や文化が絡み合い、言葉も文化も多様に入り組んで複雑な地域が、ペンテコステの出来事では視野に入れられていたことが分かります。

10 節～11 節では、ローマ帝国の首都に住む都会人、生粋のユダヤ人とユダヤ教に改宗した人の背景、クレタ島に住む島国の文化、アラビアの砂漠の文化を背景とする人たちが触れられています。これは、互いの生活習慣や価値観の隔たりの深さも、ペンテコステの出来事では視野に入れられているということです。

これらの地域にイエス様は行かれることはありませんでした。イエス様の 3 年間の活動はガリラヤ地方とエルサレムの間に限られており、約 140 ㎞（東京～静岡）位の間に収まる範囲です。しかし、ペンテコステの出来事により、イエス様を証する言葉はその数 10 倍（エルサレム～ローマ 2300 ㎞）に及ぶ範囲にまで届けられました。

つまり聖霊は、イエス様がその短い地上の生涯の間に教えきれなかったこと、また弟子達がまだ受け入れる準備ができなかったために教えられなかったことを教えるのです。聖霊の本質的な働きは、地上のイエス様の働きの継続ということが示されているともいえます。かつての地上のイエス様のお働きは、そうやって聖霊によって継続され、今の私たちに引き継がれています。

ペンテコステの出来事を過去の事として記念するだけではなく、弟子たちを新しく生かしたように、私たちも思いもよらないような、最大の奇跡を起こす聖霊なる神様の働きを実体験体できるように験待ち望み、聖霊の力、神の力を受けたいと切に求めます。